

アジアにおける IT 事情 (ASEAN 諸国の状況)



Singapore

前(財)国際情報化協力センターシンガポール事務所長
占部 浩一郎

urabe.singapore@yahoo.co.jp

●

日本に暮らしていると南アジアや ASEAN の生活は理解しづらいかもしれない。日本の社会は相当程度均質な社会であるのに対し、アジアの社会はモザイクである。このモザイクは都市部と農村部の対比のみならず1つの都市の中にも存在する。IT 先進国インドというのが電話の普及率は1割にも満たない。バンガロールには巨大なビルがそびえ立ち、その内部には最先端のネットワークインフラ、コンピュータを備えたモダンなオフィスがある。そこは自家発電により無停電が保証され、アスレチックジム、ファーストフード店もあり、米西海岸にいるのかと錯覚する。ところがその外側はまさに昔から我々が抱いていたイメージのインドがあり、車道を牛がのんびり歩いている。「普及率」というのは、対象物の総数を総人口で割って作る数字だが、こういう数字ではインドの実体を表すことはできない。本稿では統計的な説明には頼らず、現地での体感について記す。今後、インド、中国等についてもレポートする予定だが、今回はシンガポールを中心とした ASEAN 諸国の概況について記す。なお、(財)国際情報化協力センター(CICC)にはアジア各国の IT 事情に関する資料が多数あるので、興味ある方は連絡されるとよい (<http://www.cicc.or.jp>)。

■ アジアの IT を巡る課題

アジアでも IT への期待が高く、各国が IT 振興政策を策定して IT 産業の育成、経済・社会における IT の利用、デジタルデバイドの解消等に取り組んでいる。IT 計画が最も成功したのはシンガポールである。シンガポールは数次にわたる IT 国家計画を策定し、世界最

高レベルの IT 化社会を実現した。現在は第4次の計画 Infocomm21/Connected Singapore を推進中だ。シンガポールが成功した理由は、都市国家であること、政治的リーダーシップが強いことなど政治的、社会的要因が大きく寄与している。IT を活用した効率、迅速、明快な行政サービス、ロジスティックスサービス、ビジネスサポート機能の実現は、汚職のないクリーンな政治環境とあいまってシンガポールの競争力を強化した。

シンガポールの特徴は、自国ブランドにこだわらず、多国籍企業の投資を呼び込んだことにある。これは、米国からのアウトソーシングにより発展したインド、世界の IT 産業生産拠点である中国にも相通じる外資系企業とのパートナーシップを通じた経済発展であることから、アジア各国が同様の成功を享受できると考えてもおかしくない。実際には、政治的安定性、インフラの整備状況、なかでも人材の厚みなどが複雑にからんでいるのだが、その分析を欠いたまま、IT 振興のマスタープランを書いていることも多い。

アジアの IT を考えるときに、域内の連携や情報流通の少なさが気になる。すなわち、多くの情報がアジアの各国と欧米、特に米国間で流通しており、域内の流通が意外に少ない。貿易額は農産品、工業製品等の域内相互依存を背景に増加しており、欧・米、欧・亜、米・亜間でバランスがとれている。これに対し、情報の流通では欧・米間のフローが断然多くなっている。こうした中で、アジア域内の IT 分野における協力を促進するため、日本政府のアジア IT イニシアチブ、アジアブロードバンド計画、ASEAN 域内では e-ASEAN などの取組みがある。

■ オープンソースに集まる期待

アジアにおける IT 発展には人材、インフラ、資金等々の諸々の課題があるが、その1つに海賊版の問題がある。ベトナムでは、海賊版の比率が99%とも噂される。ベトナムはソフトウェア産業の育成に力を入れているが、こうした知的財産権の保護がなければ、長期的、継続的なソフトウェア産業の発展は期待できない。他方、海賊

版が多くなる背景には、ソフトウェア価格が高すぎるという問題がある。ベトナムの1人あたり国民総生産は約430米ドルにすぎない。OSとオフィスソフト一式を買えば、これより高くなる。車やバイクであれば長く使用でき、リセールバリューもある。実質的に数年しか使えないソフトに1年分の給料を出したくないと思うのは素直な感情だろう。我々に置き換えて考えれば、PCソフトが500万円といわれているようなものだ。

ベトナム政府は違法コピー減らしの決め手として、Linux等のオープンソースソフト(OSS)の振興に取り組んでおり、本年3月に国家計画を策定した。また、民間レベルでもベトナム語バージョンのLinuxが複数リリースされるなど、徐々に普及が広がっている。タイやマレーシアでも廉価版パソコンによるデジタルデバイス解消政策を実施していて、Linuxとオープンオフィスを実装したパソコンが政府の支援により廉価で提供されている。こうしたアジアのOSS振興のための施策が日本を中心に行われており、大規模なものとしてはアジアオープンソースソフトウェアシンポジウムが2003年3月から半年に1回のペースで行われており、第4回目の会議が9月初めに台北市において開催される。

■ 携帯電話がキーデバイス

携帯電話はアジア・ASEAN諸国のITのキーデバイスになっている。PCはやはり高価だし、3年も使えば陳腐化する。アジアで使われている携帯電話はGSM方式なので携帯電話の中のICカードにより電話番号やキャリアはコントロールされている。日本のように、キャリアを変えると電話機も変えなくてはならないようなことはない。携帯電話というハードウェアと通信サービスは独立している。このことは、携帯電話ハードウェアの中古市場が存在することを意味する。シンガポール人は新しいものが好きなので、毎年のように携帯電話(ハードウェア)を買い換える。この時引き取られた電話がタイなどで売られている。途上国では、ラストワンマイルの必要となる固定電話よりも携帯電話の普及率の方が高い国が結構多い。これに加えて、安価な中古もしくは型落ちの携帯端末がヒット商品となっている。

ASEANでは日本のように携帯電話でインターネットにアクセスすることはないが、その代わりにSMS(ショートメッセージサービス)という短いテキストメッセージの送受信がよく利用されている。特にフィリピンでは、全ヨーロッパ域内に匹敵する量のSMSが交換されており、政府高官との面談アポ取りなどもSMSで大丈夫だそう。ASEAN中をこうしたテキストメッセージが駆けめぐっているのは面白い。

■ シンガポールの先進性はなにか

先述したように、シンガポールは最も成功したIT計画を持つ。最近では落ち着いたものの、数年前までは数多くのIT視察団がシンガポールにやってきた。電子的なロードプライシング、ハイテク化された港湾システム、先進的図書館システムなどを紹介すると皆が感心し、「さすがシンガポールはIT先進国だ」ということになる。シンガポールの国際競争力や電子政府の状況も国際的に高く評価されている。他方、シンガポールに最近赴任してきた日本人は文句をいう。携帯電話でインターネットが使えない、たかだか512Kbpsで「ブロードバンド」と称しているし値段も高い、面白いコンテンツがない、などが主な不満のようだ。

シンガポールのITの真骨頂はビジネス面へのITの応用にある。彼らは、効率的なビジネスを行うためITを活用している。そのために社会制度を変えることを厭わない。極端な例が民事訴訟である。シンガポールで民事訴訟を起こすとき、原告側弁護士は電子媒体で訴状を作る必要がある。被告側も反論を電子媒体で作成する必要がある。こうして裁判の記録はすべて電子化されていく。こうしてできた判例のデータベースは裁判の迅速化に資するし、裁判事務自体も迅速に処理される。この取組みにより、多くの滞貨が一扫された。シンガポールの裁判所(最高裁)の建物は英国風の歴史的建造物である。その重厚な法廷の中に、数多くのLCDモニタが設置されていて、そのコントラストが面白い。

もう1つ進んでいるのがIT教育だ。シンガポールは「教育におけるITマスタープラン」を策定して教育分野におけるIT化を進めてきた。大事なことは、「IT Education」ではなく「IT in Education」であることだ。ソフトウェアの使い方も教えているが、あくまでも利用ツールとして使うことを徹底している。小学校低学年の国語の授業で児童がパワーポイントを使っていた。これでいわゆる電子紙芝居を作る。同じグループの人間が操り人形を作る。教師が与えたキーワードを使って物語を作っているのだ。こうしてできた紙芝居と人形を使ってクラスメイトに発表する。あくまでも教育手法の1つのツールとしてITを使っている。

教育省に「若い教員でないとITは使えないのではないか」と聞くと、こういう答えが返ってくる。「パソコンを使うからといって若い教師に向いているわけではない。それにパソコンの使い方など生徒の方がすぐにうまくなる。教育経験に秀でた教師がITという魅力的な道具を使うことにより、さらにすばらしい授業を行うことができる」こうした教師としての自覚と自信が「IT in Education」を支え、さらにはITを使いこなすシンガポール人を育てているのだと思う。

(平成16年6月28日受付)